

くなくとも、マス・コミと「良識家」たちの間では高まった。名を得た西尾党首は、選挙ごとに「議席を増やす」とし、「五年以内の政権担当」を三年くり上げて、三ヵ年計画とした。

その後、着々と地方の組織づくりをやりながら、早期解散を主張した。当時、社会党が「四月解散をすれば、民社はすこし延びるだろうが、解散が秋になれば、西尾ブームも下火になろう」という動機をした。安保国会における民社党の言動については、ここでは省けるが、この動機が、偶然にも十一月選挙の結果、半ばは当たったことが証明されたわけである。

良識派文化人の白屋夢

しかし、ここに一つの疑問がある。新聞が書き立てたように、「西尾ブーム」なるものが、果して現実にあったのか。それは、たんに幻想ではなかったのか。民社党が、一時的にせよ、大衆の間に「国民政党内」らしい人気をよんだ形跡はあったのか。

もし、そのようなものがなかったとするなら、マス・コミと一部学者、文化人たちが、

その美事な「綱領」と、申し分のない「活動方針」に酔うて、ひとり勝手に白屋夢をえがいていたということになる。

民社党の創立当時、「中産階級」の党というべきか、「中産階級」の党とすべきかが、党内で議論されたことがある。どっちにしたところで、現実には勤労階級を中心とした幅広い中間層が存在することは事実だ。しかしこれらの広い層の多くが、党宣言や綱領、スローガンのいかんにかかわらず、一年間の民社党の国会活動や組合活動を支持しなかったことは、選挙のフタをあけてはつきりした。大衆の政治的判断の基準は、れいれいしくぶら下げられたスローガンでも、英国や西ドイツから輸入された議会制民主主義の理論でもない。それは政党活動にあらわれた「行動」そのものである。

とくに革新政党の看板をかかっている以上、マス・コミのPRだけではどうにもならない。そこを見誤って「八十名当選」を夢みた民社党は、まさしくマス・コミ政党の悲劇だが、民社党を、旗じるしだけ立派にかかげて情眼をむさぼる無能力政党に追いこんでしまったのは、ほかならぬマス・コミの指導

層、中道主義的な「良識家」や「文化人」ではなかったろうか。

「選挙前のマス・コミの論調や評論が、かなり民社党に希望的な観測をしていたことと、選挙の実際の結果をくらべると、世論の指導者と民衆感覚との間に、なにかズレのあることを強く感じる」(明氏)、「民社党を高く評価した保守的文化人は、国民からズレていたといえよう」(大江健三郎氏、い)。

この批判は、マス・コミの指導層を含めて私のいう「民社文化人」にたいする頂門の一針というべきだろう。「民社ブーム」の到来を信じ、あるいは民社党を「革新の本流」として「育成」しようとしていた「民社文化人」の中には、平和運動や安保闘争にたいして否定的立場に立った人が数多く含まれている。これらの「議会制民主主義信仰」をもつ理想主義者たちは、「意識」という博物館行きの常識をすて、大衆の「常識」の場にかえるべきだろう。でなければ大衆感覚とのズレはなおらない。

民社党もまた、「革新政党」としての大衆の常識にかえるならば、そのすすむべき道は、おのずから明らかになるだろう。

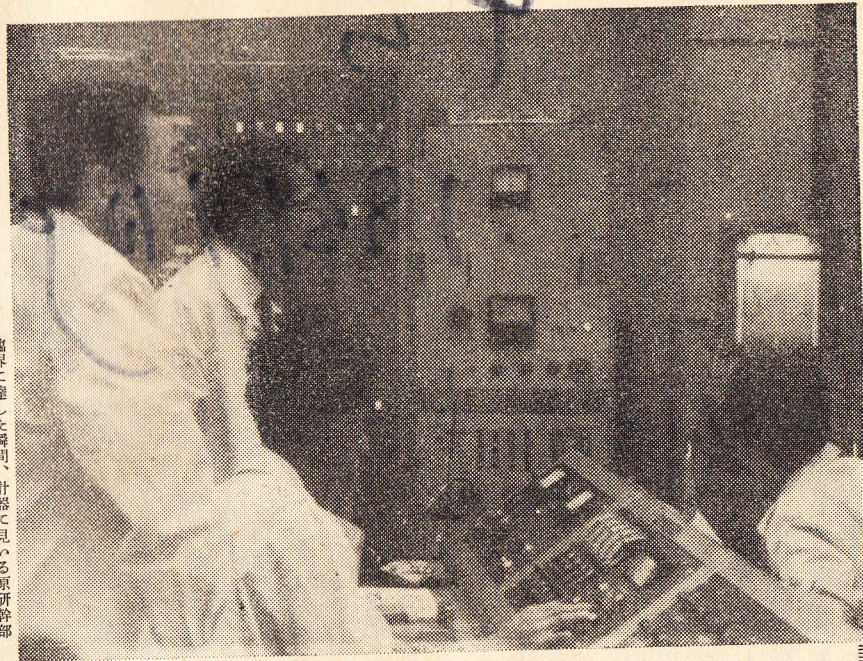
人を喰った原研二号炉

田 中 六 郎

食いも食ったり十五本の燃料棒でやっと臨界に達した原研二号炉は、完全に日本の原子力研究界のお歴々を食い荒らしてしまった！

宙に浮く夢の「かけ橋」

昭和二十九年、鳴物入りで原子力子算がはじめて計上されてから今年でもう満七年にもなるが、日本の原子力センターである日本原子力研究所（原研）では、原子炉としてはまだ研究炉一号（ウォーター・ボイラー型）という、熱出力わずか五十KWのものが運転しているだけで、原子炉を使つての研究開発はまだ殆んど緒についていないといつてもいい状態である。先月来、新聞紙上を賑わしている二号炉CP5型は、予定としては熱出力が二十倍の一万KW、研究にとって最も大切な中性子束



臨界に達した瞬間、計器に見える原研幹部

——炉内を飛び交う中性子の密度を示すものも、一平方センチ当たり毎秒百兆個という、世界でも一流に近い性能のものとして期待されていたものだ。

だから、原研の研究計画もここ数年間、一切「CP5型待ち」の姿勢にあったわけで、一号炉の方はほんの小規模の実験ができるだけだが、「CP5さえ出来れば」、すべてはそれから、という「希望の架け橋」だったのである。その当のCP5型の完成が二年四ヵ月もおくれ、建設費が数億円も値上りした上に、一応出来上ったときは、予定の十分の一の能力も期待できないということになったのである。

日本の原子力研究にとってこれほど致命的な障害となった、CP5型の遅延と性能不良については、その都度新聞紙上に取上げるだけで、原子力委員会などの行政責任のある人々もそれほど重視していないようだ。その原研の北隣りに、日本原子力発電株式会社から英国から輸入して建設中の、コールダーホール改良型原子力発電所について、原子力委員会などが示した熱意と馬力は、まだ世上に記憶も新たなところ。産業界の意向を体して、

最初から地道な基礎研究の育成よりも、外国直輸入の原子力発電の推進役を買ってきた原子力委などにしてみれば、CP5型問題への関心の薄いのも当然のことかもしれない。

しかし、原研にはすでに国費三百億円が投ぜられ、千人近い研究者を集めて将来の国産技術の完成を目ざしての研鑽が始まっているのだ。その重要な国家計画を二年以上も狂わせるような大事件を、単なる「事なかれ主義」で片づけていいものだろうか。

CP5型の問題は、ただ購入先の米国側メーカーの選定をあやまったとか、燃料の加工がまずかったとか、契約の仕方に手ぬかりがあったとかいった、それだけの理由でおきたものではない。それは、日本の原子力開発自体がもつ矛盾と無方針さが、このCP5型炉に集中的に表われたものであると思われる。

まげられたスタート

もともと、CP5型研究炉の購入がきまつたことの経緯からして、まことに不純なものであった。たしかにこの炉の建設計画は、原研設立の当時からあるにはあった。だが、それは一号炉ウォーター・ボイラー型につづい

て、国産一号炉の建設に着手してから後に購入されるはずであった。そこに降つてわいたのが、米国の研究炉購入者に対して、購入価格の半分、最高三十五万ドル（一億二千六百万円）の助成金を米国政府が出すという話であった。アイゼンハワー大統領が原子力国際市場確保のために打った、後進国への原子炉輸出推進方策だったわけである。原子力委員会は日本自体の計画の進め方よりも、この助成金をなるべくたくさんもらいたいということが頭にきてしまった。一号炉ウォーター・ボイラー型をこの助成金の対象にしたのでは三千万円位しかもらえない。早くしないと、助成金ももらえなくなるかもしれないというわけで、最初は三番目のはずだったCP5型研究用原子炉を急遽くりあげて、国産炉の方をあとまわしにすることにしたのである。

それだけでなく、原子力委員会はもう一つの無理を重ねる。国産炉も重水型、CP5型も濃縮ウランを使うもののやはり重水型。CP5型をさきにもつてくる理由にこまつた原子力委員会と原研は、CP5型を当初の予定よりずっと大きなものにして、一万KWに熱出力をあげ、中性子束も十の十四乗とするこ